記　念　講　演

ケ　ニ　ヤ　か　ら　帰　国　報　告

岸　田　袈　裟　氏　（前ＪＩＣＡ専門家）

岸田袈裟氏経歴とソロプチミスト

1977 年：ケニヤッタ大学　東京外語大学の共同研究員としてアフリカの食材、栄養、言語、文化などの調査研究に従事する一方、夫信高氏と共にトーマス・バーナード孤児院を中心に援助活動を開始

1985 年：岸田夫妻の活動に対し、首都ナイロビの国連夫人世界会議に出席した日本人有志により「少年ケニヤの友」が設立

1987 年：「少年ケニヤの友」岩手の会発足。国際ソロプチミスト盛岡の協力が始まる

1991 年：ソロプチミスト日本財団国際奉仕先に「少年ケニヤの友ナイロビ本部」が受賞。（孤児院への物資運搬用自動車購入）

1994 年～2003 年：JICA（国際協力機構）の駐在外専門家第１号になる。ケニヤにて地域住民へかまどを始めとする生活に直結した指導にあたる。

1996 年：日本北リジョンWHW賞を岸田袈裟氏が受賞。（農村女性の生活改善費用）

1997 年：SI 盛岡が主催して、JICA 専門家としてのケニヤ活動報告会開催

1998 年：認証 25 周年記念チャリティーコンサート益金を「ケニヤかまど支援」に贈呈

1999 年：国際ソロプチミスト盛岡が「ケニヤかまど支援活動募金口座」を開設。（SI 盛岡認証 25 周年記念チャリティーコンサート益金を入金）

2000 年：公益信託地球環境日本基金助成事業より助成金を受け「かまど基金」へ（薬草 40 種その他植林活動、太陽熱利用ボックスなどに）。ケニヤ政府注目

2001 年：岩手県立盛岡農業高校が「カブトムシ基金」を行いケニヤの孤児院に贈る

2002 年：ソロプチミスト日本財団「千嘉代子賞」受賞

2002 年：SI 盛岡より「かまど普及指導」用のモーターバイク２台を寄贈。カレンダー送付（毎年）

事業と其の成果

（１） 植林活動

小学生及び地域住民が一体化した組織を確立することにより育苗が順調に進み苗木の失敗率が減少した。ルアンダーＫ小学校に通学している生徒（４年生～６年生）２００人が育苗技術の実習訓練を受け、ルアンダーＫ村３００世帯を含む周辺コミュニティーの一般家庭７００世帯で植樹。３年前に植樹したものが２m以上に成長している２村から提供された土地２エーカーに植えた薬草も同様に生長している。

７００世帯に普及した薬草は４０種類に及び、これらの薬効知識も同様に広まったことで、伝統的な利用方法が立証され、住民の保健管理に置いても安心感を与える効果が出ている。世界で話題の前立腺の薬 Plunus Africana 種の急激な伐採により将来的に地元住民が利用する分がなくなるため、この種を集中的に育苗。村では将来の世界市場も視野に入れている。

ケニア政府の森林保全対策の一環として実行しているモデル村として、ルアンダーＫ村は評価が高く、日本からの援助効果も大きな話題になっている。JICA 専門家岸田袈裟氏アドバイス及び指導によりモデル村の選定は

① 幹線道路から１０ｋm離れていること
② １０ｋm圏内に医療施設がなく健康管理に問題があること
③ コミュニティ活動がしっかりしていること
④ 森林地帯が近隣にあること

などを条件にして実験活動が行われた。

今後モデル村を基点に広範囲に同様な活動が広がり地球環境保全への意識の向上が期待される。

（２） 太陽熱利用ボックス普及活動

ケニアが独立後間もなくからソーラーシステムによる技術普及のためのさまざまな催し物は頻繁に行われてきたが、一般庶民の手の届く価格の物でない上に故障時の修理コストが高いため大手企業ですら手の出ないものだというイメージが固定化していた。今回の普及を試みたものは、貧困家庭ですら持ち合わせているダンボールやアルミニウムの箱、日常使っている使い古しの鍋を再利用したもので誰でも気軽に作ってみることができるので、地元住民から歓迎された。

赤道直下の国ケニアの年間日照時間は長い。又、国土の３分の２は農業に適さない半砂漠地帯で調理用の燃料は著しくしているため、燃料をまったく必要としない太陽熱利用ボックスの有効性は「マジックボックス」と命名されたほどである。

この「マジックボックス」は食料援助はあっても調理することの出来ない難民キャンプや遊牧民の生活で最も威力を発揮できると思われる。ケニア政府のエネルギー

省が注目しているとの報告がある。
普及教材用のパンフレットを作成し、各地で太陽熱利用ボックスの普及セミナーを行いアルミニウムの配布をした。
予算の関係で印刷部数が少なかったパンフレットは増刷の要望がある。

（３）子供の死亡率を下げるための取り組み

８０年代のケニアは世界一の人口増加率に伴う様々の問題を抱えており、日本政府は人口教育を任務とし、ケニア政府の要請を受け視聴覚教材を使った教育を行った。しかし、テレビ自体が珍しく内容には全く関心を持たず其の成果が上がらなかった。１０年間に及んだこのプロジェクトの後半５年間を岸田氏は JICA の専門家として起用された。岸田さんは“ 子供の死亡率を下げなければ人口の抑制はない ”との信念で長年培ったケニヤの人々との信頼関係、彼女の得意とする台所外交、巧みなスワヒリ語で現地の人々と同じ目線にたった活動は成果を上げた。

取り組み内容

・ 飲み水
赤く濁った水は簡便な濾過槽を通すことにより透明で安全な水になった

・ 土で作ったかまど
鍋を３つ置くことができ、煮炊きの他水を沸かし飲料水、手や身体を拭く、や薬草を煎じるのに使う（以前は石を３つ置いただけのかまどであった）。
このかまど使用により下痢や皮膚病、眼病、子供の火傷が減る。薪の消費量は４分の１になった。森林の保全につながり主婦の薪取りの労働時間の短縮、腰痛予防、又、煙は蚊の進入を防ぎ食品の薫製保存にも利用される。

・ 蚊帳
マラリアを媒介する蚊に刺されないために有用である。

・ 草履
小学生に草履の作り方を教え、はだしの生活をやめさせる事によりエイズ感染予防、寄生虫の予防、子供達の衛生観念を植え付けるのに役だった。

岸田袈裟さんは愛情をもって地域住民の生活指導に当たった。
廉価で手に入る教材を用い、手作りが可能で生活に直結し改善効果が顕著である事から、村から村、県から州へと広まっている。